



テーマ

進化し続けるPSA検査

—前立腺癌診療のランドスケープを激変させた歴史と今後の展望—

司会

小川 修 先生

(京都大学医学研究科 泌尿器科学 教授)

講演者

伊藤 一人 先生

(群馬大学大学院医学系研究科 泌尿器科学 准教授)

日時

2016年 **9月3日(土)** 12:00~13:00

会場

第13会場

(神戸国際展示場 2号館 3階 3A会議室)



テーマ

進化し続けるPSA検査

—前立腺癌診療のランドスケープを激変させた歴史と今後の展望—

司会

小川 修 先生(京都大学医学研究科 泌尿器科学 教授)

講演者

伊藤 一人 先生(群馬大学大学院医学系研究科 泌尿器科学 准教授)

要旨

前立腺特異抗原(PSA)の出現によって、前立腺癌の早期診断は格段の進歩を遂げた。そして、PSA検診の普及により、発見される前立腺癌の臨床病理学的特徴は一変し、それに伴い前立腺癌治療の方向性は大きく変わり、前立腺癌診療を巡るランドスケープは一変したといわれている。さらに個々人のPSA値は前立腺癌特有の病理学的指標であるグリソン・スコアと並んで、前立腺癌の重要な生物学的悪性度の指標の一つであることから、治療法の選択においても客観的かつ有益な情報となる。また、治療効果判定においても、限局癌に対する根治的治療(手術、放射線治療)から転移癌に対する内分泌治療まで、様々な前立腺癌に対する治療後、治療中の比較的短期間のPSA値の変化が、極めて優れた長期予後予測因子となる。

PSA検査を基盤にした前立腺癌検診の癌死亡率低下効果については、すでに無作為化比較対照試験(RCT)で確実である事が証明され、スウェーデン・イエテボリで行われた長期間の研究により、PSA検診を地域社会に導入した場合の生涯の死亡率低下効果に近い有用性が示された。イエテボリ研究の検診対象は50歳から64歳の男性で、約2万人を2年に1回の検診受診を勧奨する検診群と、検診受診勧奨を行わない対照群に無作為に分けた。検診群の参加者中、約75%の人が実際に少なくとも1回は検診を受診し、中央値で14年間の経過観察の結果、検診群は対照群と比較し44%も死亡率が低下した。イエテボリ研究では、PSA検診の検診効率についても検証しており、1人の前立腺癌死亡を減らすために必要な検診受診者数は293人と極めて効率が良いことも示されている。また、PSA検診の有効性の証明は研究レベルにとどまらず、実社会への多角的なPSA検診の導入と普及により、前立腺癌治療法の進歩との相乗効果によって、地域社会や国家レベルで前立腺癌死亡率が減少してきた。

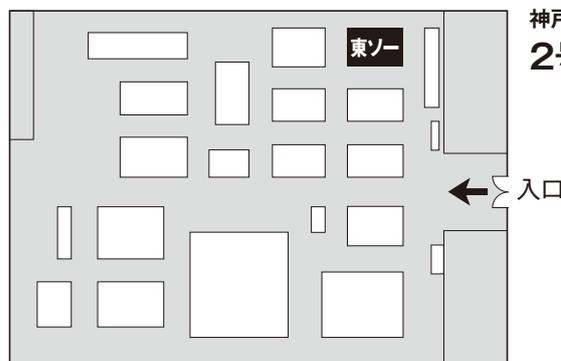
PSA検診の導入により、効率よく確実な癌死低下効果が得られる一方で、積極的なPSA検診と治療介入により、結果的に過剰診断・過剰治療による不利益を被る症例が一定数存在することも事実である。しかし、PSA検診実施によって生じる過剰診断・過剰治療の不利益、また治療に起因するQOLの低下は、PSA関連マーカーやノモグラムを用いた生検適応の絞り込み、PSA監視療法の確立、低侵襲治療の進歩により、将来に向かって少なくなっていくと考えられている。

今後も理想的な前立腺がんの検診・診断・治療システムの構築において、PSA検査は前立腺癌診療の中心的な役割を担っていくであろう。本講演では、PSA検査の癌罹患リスク予測因子としての価値、PSA検診の死亡率低下効果・検診効率に関する最新の研究成果、最適な治療法戦略の構築に欠かせない病理学的病期予測・予後予測におけるPSA検査の役割、さらには治療効果モニタリングにおける役割、PSA動態と腫瘍活動性の関連性など、実臨床での医学的価値と、将来の展望について紹介する。

第32回世界医学検査学会・ 第65回日本医学検査学会 展示会のご案内

会期 2016年 9月2日(金) 13:00~17:00
9月3日(土) 9:00~17:00
9月4日(日) 9:00~12:00

会場 神戸国際展示場 2号館 1F
東ソーブース No.2-8



東ソー株式会社
バイオサイエンス事業部

東京本社 ☎(03)5427-5181 大阪支店 ☎(06)6209-1948
名古屋支店 ☎(052)211-5730 福岡支店 ☎(092)781-0481
仙台支店 ☎(022)266-2341 山口営業所 ☎(0834)63-9888
ホームページ <http://www.diagnostics.jp.tosohbioscience.com/>